

海外だより

三輪 (Oxford) より長岡へ

3 月 3 1 日

基研の皆さんお褒りないことと思います。Oxfordへ来て早くも6ヶ月たつてしまいましたが元気でやっています。もつとも初めの3ヶ月ほどは新しく覚えるべきこと（但、日本では役に立たない）があまり多くて、その時はなかなか充実した有効な時間のように感じられたのですが、この頃は気を付けないと1と月位簡単に過ぎてしまいます。

こちらは今丁度 Easter vacation で 4月1日から第3学期の Trinity term が始まります。学期の名前は中世以来の難かしい名前がついていて、10-12月の第1学期は Michaelmas (miklmas) term, 1-3月の2学期が Hilary term という具合で、Canbrige はまた別の名称のようです。各学期の中に8週間ずつの Full term があつて、講義やセミナーはその間に集中して行われますが、lecturer は週2-5時間の講義を担当しますし undergraduate を個人指導するのもこの期間ですから、横から見ても（本人に言わせば無論のこと）まことに忙がしそうです。大学院の学生は各 term いつばいは出てくるようで、研究室がビックリするのは Christmas Easter とも1週間足らずのようです。

僕の属している Dept. of Theor. Phys. は去年 Birmingham から移った Prof. Peierls が head でいわば Clarendon Laboratory の分家みたいなもので、図書室他の設備や幾つかのセミナーは共通です。本家の主人は Prof. Bleaney. 他に Dept of Nucl Phys. (Prof. Wilkinson) がやはり分家格で、Plasma の Prof. Thompson. 素粒子の Prof. Dalitz (Oxford でなく Royal Society の Prof) も理論の建物に居ます。大学や、各 college や、教室の組織は、政府の組織がそうであるように、一律ではなく、お互の関係は昔からの習慣で結ばれているので、例えば大学院の学生は自分の supervisor が誰であるか知つていれば十分で、それ以上詮索しないのがイギリスというものだということは直きに悟ります。

理論の建物は Clarendon building の筋向いにあつて、Victoria 風

海外だより

の住宅に手を入れた小さな3階建て、60人の所帯にはいかにも狭すぎる感じがします。それでも表側の部屋は、冬でも青々とした広大な University Park を見渡す位置にあつて素晴らしい眺めですが、一方我々の部屋の先は Nucl. Phys の敷地で、現在加速器の建設中で、半年の間にどれだけ進んだかはつきりしないくらいの工事振りです。Oxford 最新のビルの1つ9階建ての Engineering Dept は7年かかったそうで、気にしないことです。

Dept には講義を担当している人が十数人、僕のような temporary な人が10人位居て、Senior Staff といわれています。大学院の学生の中にも college では fellow (又は don と呼ばれて、食事の時は high table に坐る) で学生を持つている人もいます。こういう肩書きはいろいろな場合に形式的、実質的に (外線電話が使えるとか、parking の制限がゆるいとか) 物を言うわけです。ある人の話では、Oxford では、Oxford, Cambridge, Trinity College (Dublin) の学位だけ正式の学位と認めることになっているそうで、正式の場合には、例えば Mr Mendelssohn となります。僕などつい習慣的に博士だろうとなかろうとどうしてもよく考えてしまうのですが、secretaries はよく覚えていて決して間違えません。互に話をする時はそんな差別は問題にならないことは無論で、Peierle は僕よりほんの少し背が高いだけですし、話がし易い人の一人です。

こういう伝統も少しずつ変わりつつあるので、例えば、今では science 関係の講義はガウンを着ないで出席してよいことになっていますし、2年ほど前から、入学試験の Classics の科目 (Latin or Greek) も必須でなくなりました。また現在、男子27(?)女子5のいわゆる college のようなもの (名前は college でも college のようでなかったり、別の名前でも college のようなものがありますから数など数えない方が無難ですが) がありますが、男子の college に女子の入学を許すかどうかが目下の論点の1つであるといった具合です。どれ1つをとつても700年の間に出来上った伝統を覆がえすのですからさぞかし大変だろうと思います。

大学院の学生の約半数は外国人で (commonwealth 以外の人もたくさんいます)。Clarendon も含めたメンバー (僕の知る限りで) の中にいないのは、南米とソ連位のものでしょうか。僕は4人部屋を占めていますが、こ

れがその中でも最も cosmopolitan で、ベルギー、カナダ、インド、日本という具合です。日本からは Mendelssohn の所に吉田育之さんが来ておられますし、Harwell の高田さんも時々セミナーに現われますから、まる一月日本語を話さなかつたということは未だかつてありません。それでも written Japanese の能力が低下しつつあることは確実で、手紙を書きながら漢字を思い出せないことがしばしばあり、二十何年かかつて身につけた日本語の素養がいかに浅いものか痛感しています。

物理の内容は Peierls 以下の核、Dalik 他の素粒子、ter Haar 一派の多体問題、Elliot のグループの固体といったところで、最後のが最も小人数です。一方、Clarendon の方はほとんど全部が物性実験ですから、理論屋に話を持ち込むとしたら Elliot しかないということになります。理論共通のセミナーがあるので、今はやりの SU3 の話など聞く機会が多く、耳学問にはなりますが、“物性の勉強は何をしたのだ”と物性研へ帰ってから言われないように努力しないといけません。

多少古い話になりますが、1月1日から Bristol で Solid State の学会があつて出席しましたが、このような広い分野の集まりは初めてのもので評判がよければ今後も続けるという話です。組織委員会の方針によるものですが、プログラムは Electrons in Metals の session が全体の $\frac{1}{3}$ 位を占め、半導体と格子欠陥がそれに次いで、残りは resonance, neutron, 誘電体, super, helium 等の小さい session といった所で日本の物性の分科会とは大分色合が違います。一応国内の学会ですが、アメリカをはじめ外国からの参加者もかなり多く、conference dinner で Shoenberg が十数ヶ国語で簡単な挨拶をして喝采を受けました。日本人は London から志水さん、Harwell から岡崎さん、Sheffield から三沢さん、Oxford から吉田さんと僕と大した勢力でした。

外国といえば、2月には、Birmingham の physiology の professor がチームごとアメリカへ移る計画を発表したのをきっかけに、物理では Pryce 先生はじめ昨日はあちらの大学から2人 今日はこちらから3人という具合に、科学者がアメリカその他へ出て行く話がほとんど連日新聞を賑わし、議会でも問題になりました。この現象を “brain drain from (Great)

海外だより

Britain”と呼びます。関係大臣などは“設備や俸給では到底敵わないので、要はその一員であることに満足を感じるような社会を作ることにある”とか、“世界を get around するのこそイギリスの伝統である”愉快的答弁もします。今始まつた問題でもないし、いずれ帰つてくる人も多く、そもそも科学は international なのだから、と大して重要視しない人が多いようです。テレビの interviewer は本人の所へ出かけていつて、“1人の科学者を養成するのに2万ポンドかゝるといわれているが、我々 tax payer としては大きな Loss に思えるがどうか”など遠慮なく質問します。一般に discussion とか interview とか、僕が英語のニュアンスを理解しないせいもあると思いますが、ズバリ聞くので見ていて面白く（他人事だから）しかし気の毒です。“I dont know”などと言え、意見がない筈はないという具合にやられます。

最近はこの社会や政治のことも少しわかるようになってきましたが、新聞に出る日本からのニュースはあまりに少なく、カメラとラジオと事故の国だというのも、もつともな話だと思います。時々、潜水艦寄港問題はどうか、新東海道線はどの位進んだらうか等と考えるのですが、正直な話、今年は大鵬が何回優勝するかということよりは、こちらのプロサッカーでどのチームが優勝するかの方が毎日聞かされ読まされるだけに気になることは確かです。

とりとめのない話ばかりですが、そもそも general review など通用しない国からのことですから、多分お許し願えるものと思います。

ではお元気で。

18. Beechcroft Rd.
Oxford. England

三 輪 浩